

Nara National Museum

奈良国立博物館 だより

第64号

平成20年 1・2・3月



重要文化財 釈迦八相図（部分） 三重・大福田寺

特別陳列

おん祭と春日信仰の美術

12月8日(土)～1月20日(日)
東新館

お水取り

2月2日(土)～3月16日(日)
東新館

特集展示

奈良で甦る縄文の世界 —小野忠正コレクション—

12月8日(土)～2月11日(月・祝)
西新館

涅槃

2月14日(木)～3月16日(日)
西新館

平常展

仏教美術の名品

本館 平常開館
西新館 ～3月16日(日)

中国古代青銅器

本館 平常開館

特別陳列

おん祭と春日信仰の美術

12月8日(土)～1月20日(日)
東新館



春日若宮御祭礼絵巻〈上巻〉奈良・春日大社（宵宮祭の社伝神楽奉納の場面）

冬の奈良の風物詩・春日若宮おん祭は、保延二年（一一三六）にはじまったとされ、昨年十二月十七日に八七二回目が行われました。

この展覧会は、おん祭の行われる季節に合わせ、主祭神である若宮神やおん祭に関わる品々を集め、展示を通じておん祭の一端を紹介する企画で、今回は特に社伝神楽の資料が充実しています。また春日信仰に関わる遺例を併せて展示しており、春日信仰の広がりと同様性が見渡せる内容となっています。

今も昔も盛儀を誇る南都の一大祭礼絵巻を、展示室でもじっくりとお楽しみ下さい。

特別陳列

お水取り

2月2日(土)～3月16日(日)
東新館



二月堂縁起〈上巻〉第四段 奈良・東大寺



◎香水杓 奈良・東大寺

東大寺二月堂の「お水取り」は、正しくは修二会といひ、十一面観音に悔過をする行法です。悔過とは、過ちを懺悔して除災招福を祈ること。「お水取り」は奈良時代から一度の中断もなく続けられており、今年は一二五七回目にあたっています。本展は、奈良に春を呼ぶ「お水取り」がおこなわれる時期にあわせ、「お水取り」に関連のある絵画・絵巻・図像・文書・工芸品などを、毎年内容を変えながら展示する恒例の展覧会です。

「お水取り」は神仏習合の姿が今もよく残っている点からも興味深い伝統行事ですが、今年の展示は、行法中に全国の神々の名前を読み上げる時に用いる「神名帳」や、僧侶自身や使用する道具を清めるための「中臣祓」なども紹介し、「お水取り」に対してさらに理解を深めていただく試みをしています。展示室の中央に設けられた二月堂の礼堂と内陣の原寸に近い模型は、「お水取り」の場をイメージするために大いに役立つはずです。



お清めを待つ牛玉櫃（東大寺別火坊にて）

予告

特別展

天馬 -シルクロードを翔ける夢の馬-

4月5日(土)～6月1日(日)
東西新館



◎一字金輪曼荼羅（部分）奈良国立博物館

翼をもった夢の馬「天馬」は、速く、強く、美しく翔ける究極の馬として、紀元前一千年以上もの昔に想像されました。その意匠は、ギリシア神話のペガサスを代表として、ユーラシア大陸の各地の文物にみられます。本展は、この天馬に注目し、ギリシア・ローマから西アジア、中国、日本へとつながる古代文化の東西交流の様相を、シルクロードの東の終着地とも言われるこの奈良で紹介するものです。



ステタル銀貨（ギリシア レウカス）馬の博物館

特集展示

奈良で甦る縄文の世界よみがえ—小野忠正コレクション—お の ただ まさ

12月8日(土)～2月11日(月・祝) 西新館



土 偶



石器類

〔前号で1月14日(月・祝)までとお知らせしましたが、1月16日(水)からは展示品を一部変更のうえ、期間を延長して開催します。〕

近年、縄文時代を中心に一万点の遺物から成るコレクションが奈良国立博物館の収蔵品に新しく加わりました。青森県在住の故小野忠正氏が長年にわたって収集された大コレクションです。

奈良が都になる飛鳥時代、奈良時代から一千年遡ると、縄文時代の晩期にあたります。縄文時代自体は紀元前一〇〇〇年ごろから一万年以上も続きました。そのうち、紀元前二〇〇〇年ごろに始まる後期、紀元前一〇〇〇年ごろに始まる晩期は特に東北地方で花開きました。そのうち有名なのが、遮光器土偶かめがおかが出土したことで著名な亀ヶ岡遺跡かめがおかとそれを中心にした亀ヶ岡文化です。遮光器土偶だけでなく、美しく縄文や漆で飾られた土器にも注目できます。土器以外にも石器や骨角器なども同じく製作され、たくさん出土しています。信仰や儀礼に関わる不思議な形や模様の遺物にもご注目ください。



注口土器

この時代、西日本では人口や集落の数も少なかったのか遺跡や遺物も彼の地に比べると非常に少なく見劣りします。奈良の地で、普段目にする機会の少なかった東北の縄文遺物を見ていただき、当時の人々の営みに想いを馳せていただけたらと思います。

特集展示

涅槃ねはん

2月14日(木)～3月16日(日) 西新館

釈迦の生涯の最期は、単なる死ではなく、迷妄を滅して永遠に悟りの境地に入ったこととして讃えられます。その意味で、周囲に集まった弟子や信者などは悲嘆にくれながらも、横臥する釈迦像はあくまで静謐で威厳を備えた姿に表現されます。

入滅の日とされる二月十五日には、諸寺で涅槃図を掛けて法会が行われて来ましたが、新暦の現在では一月遅れの三月十五日に行っているところもあります。

この時期に合わせ、色々の形式の涅槃図をはじめ、涅槃図を表す厨子、彫刻の涅槃像や、法会で読まれる講式などを展示し、信仰と美術の広がり的一端をご覧いただけます。



◎仏涅槃図 兵庫・浄土寺



◎仏涅槃像 広島・照源寺



◎五輪塔嵌装舍利厨子 奈良・不退寺

最果ての寺院にて

吉澤 悟 (当館資料室長)



西方かなたの仏教寺院と言えば、バーミヤンのことは誰でも聞いたことがあると思う。バーミヤン石窟寺院は、新疆やチベットのさらに西、インドの北西部へと連なるヒンドウクシユ山脈の中にある(現在のアフガニスタン)。断崖せまる渓谷に無数の石窟や高さ五五メートルもの大仏(二〇〇一年に爆破が彫られている光景は、西域屈指の仏教寺院として圧巻である。玄奘三蔵は六三〇年頃にここを訪ねている。『大唐西域記』には、伽藍が数十箇所、僧徒は数千人、一四〇―一五〇尺もの立仏石像があり、金色に輝き宝飾にきらめくと記されている。大仏は爆破以降の材質調査で六世紀半ばに造立されたことが判明したので、玄奘が目にしたのは八十歳あまりの、大仏にしてみればまだまだ若く瑞々しい姿だったに違いない。バーミヤンはその後もなくアラブの征服によって大打撃を受けるが、玄奘が記した絶頂期の姿から察して、さらに西方にも仏教が伝わっていた可能性は高い。では、西方最果ての仏教は、寺院とはどんなものだったのだろうか。この夏、念願叶い、ようやくその地を訪ねる機会に恵まれた。

現在知られている世界最西端の仏教寺院は、バーミヤンより北西へ約五五〇キロメートル、カラ・クム砂漠の中にあるメルヴ遺跡である(現在のトルクメニスタン)。同遺跡は首都アシガバッドから車でおよそ四時間。イランとの国境になっているコッペ・ダーグ山脈沿いに東進し、カラ・クム砂漠の南端を走るとマリ市に到着する。途中、砂漠の中に二〇キロメートルくらいの間隔で小山が点在していたが、これはシルクロード沿いに営まれた古代の村や町の遺跡である。マリ市の郊外に広がるメルヴ遺跡は、かつてシルクロードの重要拠点であった。ここから西はニシャプール、テヘラン、バクダッド(以上イラン)と連なるペルシア世界。東はプハラ、サマルカ

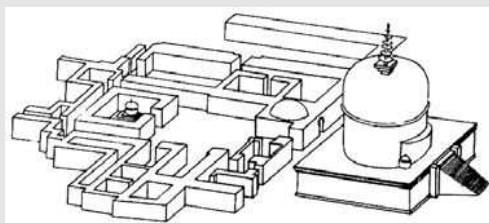


メルヴ出土の片岩製仏像 (5世紀)

ンド(以上ウズベキスタン)、そして天山山脈を越えて新疆へと続く。砂漠化した遺跡の周囲は、乾燥と塩害に強いタマリスク(灌木)のほかに木の影もなく、かつてのオアシス都市は見えない。メルヴ遺跡は紀元前六世紀、アケメネス朝ペルシア時代にはじまる。その後パルティア時代以降に二辺約二キロメートルの城壁を



メルヴの仏教寺院跡



もった巨大な城塞都市に発展した(紀元前二世紀―後十一世紀)。最果ての仏教寺院は、城壁の内側、南東隅にひっそり造られていた。一九五〇年代にソ連科学アカデミーのマッソン(M.E. Masson)らによつて発掘が進められ、一基の大型ストウーパとその後背に三三の部屋をもつ僧房区で構成されていたことが明らかとなった。当初のストウーパは小型であったが、幾度も修復され、その度に日干し煉瓦と漆喰が塗り重ねられ、次第に大型化していったという。一九六二年、このストウーパの残骸中から大型の塑像と、鮮やかな彩色の壺が発見された。この壺は今日「メルヴの壺」と呼ばれ、アシガバッド国立博物館の展示室で多くの人を魅了している。白地に赤いハートマークを散りばめ、



メルヴの壺 (5世紀)

景、そして死出の分かれ道を黒や赤、青の顔料を使って描いている。寺院内の生活とは縁遠い感のあるこの壺の中には、実は、白樺樹皮にサンスクリット語で書かれた經典が収められていたのである。最果ての寺院で語られた仏説は、もしかしたら人間一人の生涯に引きつけられた喜怒哀楽に富んだ「教え」であったかもしれない。壺と經典のアンバランスさからそんな想像が膨らむ。東の果ての日本では、鎮護国家を祈り、あるいは「異国の薬師こそめでたかり(薬師寺仏足石歌碑)」としていた。一方、西の果て、ゾロアスター教を国教としたササン朝ペルシアの版図の中では、仏教は異教として細々と、しかしヒューマニズムに溢れるかたちで信者を集めていたのかもしれない。

今や日干し煉瓦が砕けて土山と化した寺院跡には、岩肌を穿つバーミヤンのような豪快さはない。僧坊のスケールも「僧徒数千人」の規模は見込めない。しかし、同じ頃、さらに山を越え、砂漠を渡つてここに伽藍を構えた人たちがいる。その、ささやかな息づかいが聞こえるようであった。



同右「死出の別れ」



同右部分「男女の出会い」

特別展「美麗 院政期の絵画」の印象

須藤 弘敏
(弘前大学人文学部教授)

本展は、美術史研究者ならば誰もがその開催を夢には見ても可能だとはとても思えない奇跡のような展覧会だった。大規模な展覧会の常として、各方面への依頼と所蔵先への出品交渉が幾度も重ねられるのだが、担当芸員の構想どおりに作品を集めることはまず不可能である。まして、本展のような、国宝と重文ばかりを集める企画の場合、構想すること自体が無謀と呼ばれかねない。だから、いつかは並べ見比べたいと願っていた、ボストン美術館の馬頭観音像と奈良国立博物館の十二面観音像、あるいは伴大納言絵巻と信貴山縁起絵巻がすぐそばに陳列されているのを見たときは、本当に頬をつねりたい気がした。

とは言え、本展は国宝、秘宝、名宝などの肩書きで有名な作品を大量に集めただけの企画ではない。その趣旨はきわめて明快で、院政期という一つの時代がつくりあげた美意識を確認するために、それにふさわしい作品を集めた



結果があつたのである。驚くべきことは、名品大集合ではなく、世界でもまれな院政期の高度な芸術的環境なのである。そこを勘違いしたならば、単に集客のための企画

と誤解することになり、これを実現させるに至った奈良国立博物館の学術的な研鑽に対して失礼であろう。正直に言つて、例年のことく長蛇の列の観客を集めた正倉院展よりも、これほどの内容に対して観客数が必ずしも多くはなかった本展にこそ奈良国立博物館という機関の本当の見識と実力があらわれていたように思っている。

同時代の作品多数が、堂に集められた結果、院政期絵画の色彩や空間に関する感覚とその微妙な変化が感じ取られたことと思う。また、実在感と夢幻性の間で多様な表現が試みられ、徐々に確固としたイメージの把握に向かうかと思つていた院政期絵画の展開も自然に理解されたことと思う。同時代の仏画と絵巻が一緒に展覧されることで、そこに共通する感覚と二方異なつた志向とが存在することも明らかになつたと思う。

そして、本展の真骨頂は第二展示室の絵巻群で、それは後白河法皇の宝蔵蓮華王院の蔵開きにほかならなかつた。彼が示した芸術への偏愛と独自の世界観人間観をなぞることができたこの展示は、美術史だけでなく文学や歴史、思想に関心のある方々にとって実に興味深いものだらつたと思うし、第一展示室は実はここへ誘導するための余りにも贅沢な序章だつたかとさえ思われるのである。

最後に、異例なことは承知で、奈良国立博物館での最後の担当事業として、このすばらしい展覧会を企画実現させた梶谷亮治学芸課長に心からお礼申しあげたい。氏の長年にわたる奈良国立博物館研究員としての業績に対する信頼と感謝の念から、高野山を初めてする多くの寺院やボストン美術館など関係機関がこぞつて協力を惜しまなかつたことは知る人ぞ知るところである。

●公開講座●

- 1月12日(土)「社伝神楽と富田光美」
岡本彰夫 (春日大社権宮司)
- 3月2日(日)「修二会について」
上野道善 (東大寺別当)
- 3月15日(土)「座談 文化財修理40年 ―彫刻―」
松永忠興 (財団法人美術院)
(司会進行) 鈴木喜博 (当館上席研究員)
- ※各回とも午後1時30分～3時(開場は午後1時)、当館講堂にて。聴講無料。
定員200名。午後1時より講堂入口で整理券を配布します。

●サンデー・トーク●

- 1月20日(日)「縄文との出会い」
岩戸晶子 (当館研究員)
- 2月17日(日)「お水取り 存続の危機を越えて」
西山 厚 (当館教育室長)
- 3月16日(日)「仏教の説話絵」
梶谷亮治 (当館学芸課長)
- ※各回とも午後2時～3時30分(開場は午後1時30分)、当館講堂にて。
聴講無料。

●特別陳列関連イベント●

- 「春日若宮おん祭の舞楽」
1月19日(土)午後2時～(開場は午後1時30分)
- ・会場 当館講堂
 - ・料金 2,000円
 - ・出演 南都楽所

◆キャンパスメンバーズ

当館は、大学等と連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を提供する「キャンパスメンバーズ」の制度を設けております。

会員大学等の学生は平常展については無料、特別展については400円(共催展の場合は別途定める。)で観覧できます(学生証および引率教職員は身分証明書の掲示をお願いいたします)。

〈会員大学等〉(12月1日現在)

大阪大谷大学・大阪大谷大学短期大学部、大阪教育大学、大阪成蹊大学芸術学部、京都工芸繊維大学、京都嵯峨芸術大学・京都嵯峨芸術大学短期大学部、京都精華大学、京都大学、京都橘大学、近畿大学文芸学部、種智院大学、帝塚山大学・帝塚山高専、同志社大学文化情報学部、奈良教育大学、奈良佐保短期大学、奈良産業大学・奈良文化高等学校・奈良学園高等学校・奈良文化女子短期大学、奈良女子大学、奈良先端科学技術大学院大学、奈良大学、佛教大学、龍谷大学(五十音順)

※キャンパスメンバーズに関するお問い合わせは、
奈良国立博物館 総務課 企画推進係まで。

平常展の
みどころ

じゅういちめんかんのりゅうぞう
十一面観音立像

奈良・元興寺
木造 像高179.2cm
鎌倉時代(13世紀)
重要文化財

少年を思わせる風貌が、鎌倉時代前～中期に南都を中心に活躍した仏師善円(善慶)ないしその系統の作品を彷彿させる像。

X線透過撮影の結果、新知見が幾つか得られている。第一の知見。本像は鎌倉時代以降に流行した玉眼技法を採用している。これは薄く削り出した水晶板を嵌めて、生きた人間の濡れたような眼珠の感触を表現するもの。通常、像内から木を当て、木釘や鉄鏝を打付して水晶板を固定するが、本像の場合そうではなく細長い竹箆状のものをつっかえ棒にして留めている。この技法は善円やその息子である善春の作品に例がある。

第二の知見。左耳上の頭上面は牙を上向きに出した忿怒相を表す。その表面は漆製品に特有の割れ方(断文)をみせており、奈良時代に盛行した木心乾漆造によると推定される。X線写真を見ると、耳たぶの芯に銅線を用いており、この技法も奈良時代に認められる。

第三の知見。本像の胸部には像高6cm弱の小さな十一面観音立像が、また胸から上腹部にかけては10数巻の経巻が納入されている。これらの納入品の有する意義については今後の課題として検討してゆきたい。

岩田茂樹(当館美術室長)
本館



かんじょうずいがんおうじょうきょう(いしかわのとしたりがんきょう)
灌頂随願往生経(石川年足願経)

奈良国立博物館
紙本墨書 縦25.8cm 長548.0cm
奈良時代(8世紀) 重要文化財



天平9年(737)に、当時出雲守の職にあった石川年足(688～762)が発願し、完成させた写経である。黄褐色の紙に薄墨で界線を引き、経文を墨書する。

巻末の願文によれば、石川年足は亡き子息二郎の冥福を祈るため、薬師如来と日光・月光菩薩の三尊を描いた絵画一鋪をつくるとともに、この經典を書写したという。天平9年といえば、都で天然痘が流行し、藤原不比等の四子をはじめ多くの人が病死した年である。二郎もこの病に倒れたのだろうか。

さて、石川年足は出雲守を務めた後、中央政界で順調に昇進し、天平宝字2年(758)には正三位となり貴族の仲間入りを果たした。勤勉家として知られ、政府の要職を歴任したが、公務の合間も時間を惜しんで読書に耽ったという。

ところで、石川年足の名が記された遺品には、もう一つ、墓誌がある。天平宝字6年(762)の没時に遺骨とともに埋葬されたもので、江戸時代に現在の高槻市で発掘された。約30cmの縦長の銅板に、出自、没時の官位、年月日、葬送場所等が刻まれる。

石川年足のように写経や墓誌に名を残し、かつ正三位の高位に至った奈良時代の官人は、ごく少ない。それだけで有名人になってもおかしくないが、残念ながら年足の名は一般にはあまり知られていない。それは、後世の記憶に残るような華々しい事績がないためであるが、その事実が、かえって彼の真面目な性格と実務的な仕事ぶりを、よく物語っているように思われる。

野尻 忠(当館研究員)
西新館 1月16日(水)～2月17日(日)

開館予定(1月～3月)

■開館時間

午前9時30分～午後5時(1月13日(日)、
2月3日(日)、3月12日(水)は午後7時まで)
※いずれも入館は閉館の30分前まで

■休館日

月曜日(ただし1月14日、2月11日、3月3日、
3月10日は開館し、1月15日(火)、2月12日(火)
は休館)

※新年は1月2日(水)より開館いたします。

観覧料金

平常展(特集展示を含む)・特別陳列

	一般	高校・大学生	中学生以下
個人	500円	250円	無料
団体	400円	200円	

- * 団体は責任者が引率する20名以上。
- * 70歳以上の方は無料。
(入館の際に年齢のわかるものをお示しください。)
- * 障害者の方と介護者(同人数)は無料。
(入館の際に障害者手帳をお示しください。)
- * 節分(2月3日)は無料観覧日です。
- * 「夫婦の日」割引
毎月22日(「夫婦の日」)にご夫婦で観覧される方は、
一般料金の半額になります。



〔交通案内〕近鉄奈良駅下車徒歩15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス「氷室神社・国立博物館」下車

※当館には駐車スペースがございませんので、最寄りの県営駐車場等(有料)をご利用下さい。

 奈良国立博物館
Nara National Museum

「奈良国立博物館だより」は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒を同封して、当館の情報サービス室にお申し込みください。
※返信用封筒には宛名を明記し、長形3号の場合は90円切手を、角形2号の場合は120円切手を貼付してください。